

学会の将来展望

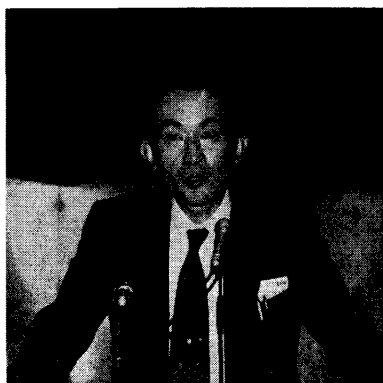
誌名	日本土壌肥料学雑誌 = Journal of the science of soil and manure, Japan
ISSN	00290610
著者	野々山, 芳夫
巻/号	49巻特集号
掲載ページ	p. 11-16
発行年月	1978年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



学会の将来について考える

—新しい世紀に向けて学会の構造と機能を探る—



梅 林 正 直*

はじめに

ただいま村山登前会長から過分の御紹介をいただきました中に、論客という話が出ましたが、私は普段から二言も三言も多いわけではないのです。一言ぐらい多かったせいか、こういう所へ出して可愛がってやろうという温かい思いやりから、村山さんや平田熙君が計画され、私にやれということになりました。今日は私が中年を代表して、「学会の将来について考える」という題目でお話をさせていただくことになり、このような機会を得まして誠に光栄に存じております。学会 50 周年、半世紀を経たわけですが、新しい世紀すなわち 21 世紀に向けて学会の構造と機能を探ろうと大きな副題をつけました。先ほど熊田恭一新会長をはじめ御来賓の皆様のお祝詞の中にも、また野々山さんのお話にもありましたように、実際のところ学会の将来については、いろいろな意味で皆様それぞれにお考えだろうと思います。そこで私自身が日頃考えたり感じたりしたことを、この際にお願という形でお話申し上げたいと存じます。

学会の現状

御依頼の時に過去は振り向かないでということでございましたので、学会の現状はどうかということから入っていきたいと思います。この学会の現状分析にあたりましては、村山会長をはじめ吉田武彦評議員や事務局の平田栄子さんの御協力を賜わり、また 40 周年の時に玉井理さん（宮崎大学農学部）がおまとめになったものを基礎にして、その上に積み上げたものが第 1～3 表でございまして、そして第 4 表には土壌肥料学会と姉妹関係にある学会や研究会の皆様方の労をわずらわしまして、関連学会や研究会の現状をとりまとめてみました。関係の皆様のお協力に深く感謝する次第です。

年次	大学	第 1 表 正会員の所属別推移				人数 (比率 %)	
		国立試験 研究機関	公立試験 研究機関	民間	その他	計	
1955 年	250 (19.3)	294 (22.7)	372 (28.6)	382 (29.4)		1,298	
1967 年	305 (17.2)	341 (19.2)	647 (36.4)	180 (10.1)	304 (17.1)	1,777	
1977 年	449 (22.2)	327 (16.2)	782 (38.7)	203 (10.1)	258 (12.8)	2,019	

第 1 表の正会員の所属別推移をみますと、1955 年と 1967 年と 1977 年があがっていますが、これは 1967 年が昭和 42 年で 40 周年に当り、その 8 年前と 10 年後を比較したということでございまして、実は、この正会員の数を正確に把握するのは簡単なように見えていろいろありまして、まず会費をきちん

学会あるいは土壤肥料学に対して、「何を感じ、何を問題としているのか。またどのような方向を目指しているのか。」ということであろうと解釈いたしました。私はこのような内容で、以下話をさせていただきたいと思います。

2. 学会の問題点

最初に学会誌についての率直な感想を述べ、そこから学会の問題点を考えてみたいと思います。

学会活動は、主に雑誌の発行と学会講演会に代表されると考えます。学会講演会の要旨集は正規の報文とはみなしがたく、学術上の文献として引用するには問題があると言われていています。そこで、学会誌としての和文誌について感想を述べたいと思います。

和文誌は率直に言って、あまりに基礎学的内容の報文が多いこと、役に立つ報文が少なく、魅力に乏しいことです。私が役に立ったものとして印象的に思い出すのは、「部門別進歩総説特集号」とか、「水田の窒素をめぐる諸問題（特集号）」です。後者では、作物生産に直接関係する問題が、大学、国、県の試験研究場所、さらに民間の肥料関係など、広い範囲にわたる著者によって論じられています。

また、40周年記念誌によれば、学会創立当時の「土壤肥料学雑誌」の内容は、理論的な面とともに、実用方面にも重点を置いていた²⁾ といえます。このような学会誌であるならば、私にとって魅力あるものと言えます。

以上は和文誌についての個人的な感想ですが、これらに関する学会の問題点については、すでに40周年記念誌の「日本土壤肥料学会 40年の歩み」のなかで詳しくふれられています。ここでその一部を引用させていただきたいと思います。

「これらの各方面への分化でもなく、同じ学問内においてもあまり基礎学的なむしろ理論学的な面に没頭する研究者と農業に関する実学あるいは技術学に取り組んでいる研究者の共同の発表の広場としては、距離が大き過ぎるということは無かるか。」²⁾ と、このように指摘されています。

10年前のこの指摘には、私が学会の問題点として感じていることがそのまま含まれています。それはこの引用の表現を使わせていただくならば、基礎学的研究と実学的研究の距離が大き過ぎること、しかも両者が有機的な関係をもてなくなっていることです。別の表現をすれば、基礎学的研究は抽象化された単純な系のなかで、生産現場の課題を離れて自己運動しているのではないかということです。私は地方の試験場にて、このことを強く感じています。また10年前の指摘を再び指摘しなければならないことに複雑な気持ちを抱いています。

昨年日本作物学会 50周年記念講演において、県農試に所属する若手の方が似たようなことを述べられています。すなわち、「これを作物栽培研究の場合にあてはめるならば、やはり具体的な技術上の問題点の解決方法あるいは新しい栽培技術の開発にまでつながる研究でなければ意味がないと思います。作物の基礎的研究は極論すれば農業生産の現場から逃避しているようにも思われます。」³⁾ と。

こうしたことからみますと、日本土壤肥料学会にあらわれている問題は、農学を構成する他の学会にも共通的にあらわれている。そのような気がしています。

3. 生産現場の課題と基礎学的研究

それではなぜ、基礎学的研究が生産現場の課題を離れて自己運動しがちなのでしょうか。この要因に

ついて考えてみたいと思います。

土壌肥科学を含む農学では、二つの大きな要因があるのではないかと考えます。一つは研究の評価に関する問題であり、次は試験研究機関に見られる、研究の段階による分担区分に関する問題です。

試験研究機関に見られる、研究の段階による分担区分とはどういうことかといえますと、基礎学的研究は大学など、実学的研究は試験場がそれぞれ分担するというを指します。こういう考え方が試験研究機関に見られるのではないだろうか。そして、行政の官僚的、中央集権的体質が試験研究機関にも反映し、試験研究機関に序列意識が見られるのではないかという気がしています。たとえば「農業技術研究所 80 年史」によれば、旧農事試験場創立時にすでに分担区分の考えが明確に出ています⁴⁾。また府県農事試験場の設置に伴い、「国立農事試験場はもっぱら研究的試験を行うことにより、全国的に指導が一元化するに至った⁴⁾」と解説されています。

こうした研究の段階による分担区分の考えが、基礎学的研究が生産現場の課題を離れて自己運動しがちにさせている大きな要因と考えます。

ここで、生産現場の課題と基礎学的研究との関連について、現状で私が何を考えているのか、簡潔に述べさせていただきます。

私は、何よりも生産現場の課題を解決することを重視したいと考えます。今日とくに必要とされているのは、生産現場あるいはそれに近いところで、現場の課題に直結した本質的な問題を、研究の方法論、これについては一部後で触れますが、研究の方法論を考慮して、基礎的な段階まで深めて研究することであると考えます。このことがまさに役に立つ研究につながると考えます。

次に、基礎学的研究が生産現場の課題を離れることについてのもう一つの要因である、研究の評価に関する問題について触れたいと思います。

40 周年記念誌より一例を引用し考えてみたいと思います。

「科学が厳密な因果関係の究明を指向するかぎり、より単純な系で、条件を完全にコントロールでき、再現性のある結果を求める方向に発展することは必然であります。」「ここでは、より抽象的ではありますが一般的な原理への到達の途がひらかれております。しかしそれは抽象的であるが故に、きわめて複雑な次元にある農業生産に対しては、なお具体性を欠きはなはだしい懸隔を感じさせる場合が多くなります。しかし、このような追求の方向は、体系的な一般原理を確立するために、歩まなければならない一つの途であると思います。実用価値だけからの、近視眼的な評価はさけるべきでありましょう。』⁵⁾と、このように述べられています。

私はこうした一面を否定するものではありませんが、現状の評価には農業生産への寄与という面がややもすれば忘れられているのではないかという気がします。それは、たとえば水稻生産に多大な貢献をした多収穫技術に関する報文の学会誌に載った割合が低かったことに示されていると思います。さらに現状での研究の評価に、農業生産への寄与という面が軽視されていることには、基礎学的研究を担っているとされている大学のみ学位審査権があることが関連していると考えます。

それでは、研究の評価のあり方について、私が何を考えているのか述べさせていただきます。

研究の評価は学問の内容にかかってきます。ここでは農学というレベルで、農学の内容について三つ

の点に触れたいと思います。

まず、農学は農業生産の実践的な必要から生まれたこと、農学と農業はそれぞれ独自性を持ちながらも緊密な関係をもって発展していること、このことは言うまでもないことであると考えます。したがって、農学の研究では、農業生産への寄与という面が重視される必要があると思います。

次に、生産目的が重視される農学では、経験的な知識に基づく法則、これはある意味でかっこつきの法則と言えるでしょうが、それは実践的には有効ですが、まだ十分に解明されていない法則が重視される場合が少なくないと思います。これは、わからない部分はわからないものとして残しながら、全体的にとらえ、法則を明らかにしていこうというものです。農学にはこうした特有の手法、領域があると思います。

三つ目は研究の組織化についてです。農業が発達し、社会が複雑化している今日における農業生産の現場からの課題は、複雑な動的な系における総合的内容を持っていると思います。すなわち、当面の課題あるいは将来を見通した課題という時間的な内容とともに、個々の技術課題、個別技術の体系化された課題、これらに経営のおよび地域的要素が加わった課題という、いわば空間的な内容が含まれていると思います。したがって、生産現場の課題を取り上げる研究の側では、応用的な段階から基礎的な段階へと研究の深化が行われ、その成果を元に戻していくという、いわば縦の相互関係と、研究の各段階における他の分野との、いわば横の相互関係が、研究者の専門化が著しい今日ではとくに重要であると思います。

農学研究の評価は、研究の農業生産への寄与を軽視しないとともに、研究の手法、組織化を含めた研究の方法論を十分考慮して行われるべきと考えます。

4. 学会のあり方

最後に学会のあり方について触れたいと思います。私が最初に指摘した学会の問題点、すなわち基礎学的研究と実学的研究の距離が大き過ぎること、しかも両者が有機的な関係を持ってなくなっていること、このことについて、学会自体はどのように評価すべきでありましょうか。

社団法人日本土壤肥料学会の目的は、定款第4条に、「本会は、土壤、肥料及び植物栄養に関する学術の進歩及び普及を図り、もって人類の福祉に寄与することを目的とする。」と、このようになっています。

昨年日本作物学会 50周年記念講演で、県農試に所属する若手の方が次のように発言されています。「昨春の評議員会で、作物学会会則第2条に、学会の目的の一つとして『普及』の一言を入れるという幹事会提案が否決されたことは残念でなりません。」³⁾

これに比較しまして、私たちの日本土壤肥料学会は、創立時(「土壤肥料学会」と称していました)より目的の一つとして、「普及を図る」ということを掲げてきました²⁾。このことはまさに卓見というべきでありましょう。

学会は学会活動を総括する場合、学会の目的に沿って、すなわち学術の進歩と学術の普及という二つの面から、さらにそれらを統一させて、過去、現状を評価すべきであると考えます。すでに指摘したような問題点は、学会にとって好ましくないことは明らかであります。したがって、緊急に意識的な取り

組みをもって是正されるべきと考えます。

それでは、いったいどのような方向に是正されるべきでしょうか。私は学会の実情に詳しくありませんので、基本的な2、3の点について触れさせていただきます。

まず、日本土壌肥料学会は、その目的から基本的に開かれた学会、すなわち生産現場の第一線で活躍されている普及組織の人たちまで幅広く参加できるものであることが必要です。私は、このことは基礎学的研究の内容をより豊かなものにし、その発展にも寄与するものと考えます。その理由は、たとえば研究の成果である法則、これは研究者が認める法則であって、生産現場での実践を経て確かめる必要があるからです。

さらに、学会がその目的を達成するのにふさわしい運営体制がとられるべきであると考えます。評議員会などは学会員の会員構成、たとえば所属機関、年代構成を正しく反映する形で構成される必要があると思います。具体的には都道府県の試験場関係の方、および若手の代表がもっと選出される必要があります。

学会誌のあり方についてはすでに触れましたので、ここでは省略させていただきますが、若干つけ加えたいのは、学会の目的の一つである学術の進歩をはかるという面からは、たとえば欧文誌を国際的にさらに評価高いものにするなどの検討の必要があるのかもしれない。

学会講演会のあり方について、たとえば部門の分け方などについて、学会の目的の二つの面を统一的に発展させる立場から再検討する必要があるのではないかと考えます。

私は、シンポジウムがさらに積極的に行われることを期待しています。そのテーマには研究の方法論、日本農業の将来展望といった問題も含まれるべきと考えます。この点では他学会の活動に学ぶ必要もあるのではないかと思います。たとえば、日本作物学会の1971年の「作物研究の歴史と展望」というテーマでは、「内容的には単なる研究成果の披瀝回顧に終わらせることなく、研究の動機、方法論、実際農業とのつながりなどを通じて、各研究者が自らの研究に対してどのような考え方、姿勢で臨んできたか、またこれから臨もうとするかという点について話題を提供し、」それに焦点を合わせて議論を進めています⁶⁾。

また、学会と農業あるいは社会問題との関係についても触れておきたいと思います。

すでに述べましたように、学会と農業あるいは社会とはそれぞれ独自に発展していますが、両者が緊密な関係にあることは明らかです。したがって、学会にとって関係が深い農業あるいは社会問題、たとえば食糧自給率の問題、現在の最大の農業問題である水田利用再編対策などについて、学会としての問題点の検討、さらに問題点の是正を求める行動、研究集団としての具体的提言などが行われるべきと考えます。

5. おわりに

以上、私は「学会の将来展望——地方の試験場において考えること——」というテーマのもとに、必ずしもテーマに十分沿えなかったかもしれませんが、学会あるいは土壌肥料学が全体としてこうあるべきだということを総論的に話をさせていただきました。

さて、重要なことは、常にいかに実践し、具体的な成果を出すかにかかっていると考えます。私は、

課題の本質をとらえ、将来を見通す力量、集団で自主的に行動する力量をいっそう身につけるよう努力し、与えられた課題の解決に当たりたいと思っています。私の話が一つの契機となり、それぞれの単位での討論と実践がよりいっそう深められることを期待します。さらに私の話について、率直な御批判をいただければ幸いです。

最後になりましたが、このような場で、私のような未熟な者に発言の機会を与えてくださったことに、心から感謝いたしたいと思います。また、本講演を準備するにあたり種々御援助を受けた多くの方に感謝します。

なお、40周年記念誌などの引用にあたって著者の真意を正しく紹介していない点があるとすれば、私の未熟さによるものであり、著者の方々に深くおわびしたいと思います。

これもちまして、記念講演とさせていただきます。御静聴ありがとうございました。

文 献

- 1) 石沢修一：創立 40 周年を迎えて、わが国における土壤肥料学の進歩（日本土壤肥料学会創立 40 周年記念），p. 3～5，日本土壤肥料学会（1968）
- 2) 藤原彰夫：日本土壤肥料学会 40 年のあゆみ，同上，p. 13～27（1968）
- 3) 石田康幸：日本作物学会創立 50 周年記念にあたって，日作紀，46，13～15（1977）
- 4) 農業技術研究所 80 年史編さん委員会編：農業技術研究所 80 年史，p. 4～5，農業技術研究所（1974）
- 5) 村山 登：わが国における植物栄養研究の現状と将来の展望，わが国における土壤肥料学の進歩（日本土壤肥料学会創立 40 周年記念），p. 37～47，日本土壤肥料学会（1968）
- 6) 武田友四郎編：日本作物学会シンポジウム紀事，第 5 集，p. 1～25，日本作物学会（1972）